

ハーバードで語ったこと

画・onyx

田中 均

毎日新聞
2011年(平成23年)11月9日(水)

世界の鼓動

10月半ば、米国のハーバード大学を訪問した。アジア・センターの指導者招聘計画で招待を受け、ケンブリッジに1週間滞在し、2度講演するとともに、多くの教授と東アジア政策や日米関係、さらに指導者論などで意見交換を行った。ハーバードは創立375周年を祝賀する旗(ハーバード・カラーアであるえんじ色)が紅葉しつつある木々と一体化し、美しかった。

近年日本からの留学生は減ったが、中国人やインド人の留学生が飛躍的に増えている。ハーバードの学生への執着心のなさを言う。博士課程に来る優秀な学生ですら、博士論文を出す前に日本に帰

り、就職してしまう。それに比べて、中国人的学生は学位の取得に一生懸命だ。多分、日本ではハーバードといえども外国の学位はキャラ上さほど価値がないと思われているのだろう。それが留学生の減っている一つの理由もある。

今回の訪問で、エズラ・ボーゲル教授が日本人留学生のために主宰している「ボーゲル塾」にも参加した。私はあえて、「皆さんは、日本人であることを忘れてほしい。ハーバードで勉強をしている最大の意味は競争に身をさらし、世界に通用する普遍性をもった知識的指導者になることだと思う」と申し上げた。日本の社会だけを念



あるべきアジアとの関係

頭に行動する時代ではない。世界で生きるために、ハーバードの学位も有用である。

ハーバードでの講演と、その後のハワイでの北東アジア協力対話(日、米、中、韓、露の政府関係者ならびに有識者が会合)では、今後の米国との東アジアへの姿勢について、二つ注文をつけた。

まず、米国は中国を「戦略的競争者」、「責任ある利害関係者」あるいは米国と共に世界を論ずる「G2」などと形容してきたが、自国との対比で他国を一方的に断じるのはやめた方がよいのではないか。中国も米国ももちろん日本も、今後より良い方向に変化しなければならない。東アジアの「高

質化」(エンリッチメント)に米国も参画し、地域全般の環境を良くするという概念のなかで中国についても語るべきではないか。

そして、第二に、米国はイラク戦争の教訓を十分踏まえて、東アジアへの関与を考えてもらいたい。イラク戦争では、地域のパートナーなしに外から国を作り変え

ようとして成功せず、多大の負担を米国に強いた。今後、東アジアでは中国の経済力・軍事力がますます拡大する。米国は日本や韓国、豪州など同盟国及び東南アジア諸国と地域でのパートナーシップを強化していくべきだろう。

米国の単独行動主義(ユニラテラリズム)は言い古されているし、オバマ大統領の下で米国は多国籍主義に傾斜してきたとされる。財政赤字に苦しむ米国が、今後単独で軍事行動をとるとも考えにくい。ただ、世界の指導者としての責任を果たすため、最後は行動すべきとの認識は引き続き強い。このような米国と日本は、今まで以上に強いパートナーシップを築いていかねばならない。

ただ、日米関係の重視と米国への追隨は同義ではない。普天間問題や環太平洋パートナーシップ協定(TPP)にしても、常に自身で考えるのではなく、主体性をもつて未来志向的に考えていくべきである。次期戦闘機についても、現在米・欧の航空機が候補となっているが、厳密に技術的メリットに基づいて主体的選定が行われることが重要だ。審観的な性能に基づく選定をゆがめたととられることは、かえって日米関係を損ねかねない点に留意すべきだと思う。

(たなか・ひとし)日本総研国際戦略研究所理事長

*毎月第2水曜に掲載します